



# ピカチュー号



第199号

発行日：令和2年8月1日

発行者：医療法人 博愛会

福田脳神経外科病院

院内情報委員会

## 診察室から 脳動脈瘤 検査

院長 福田 雄高

先月号（ハム太郎号）では、くも膜下出血は、その多くは脳にある動脈瘤が破れてしまう病気であること、また一旦破れてしまうと重篤な状態に陥る、亡くられる方も一定の確率で存在するという内容でした。そこで、動脈瘤を調べるにはどんな検査があるのでしょうか。

動脈瘤を調べる際に、まず最も体に影響がない検査といえば、頭部 MRI 検査になります。磁力と電磁波の力によって、体に負担を与えずに動脈瘤の有無を確認することができます。但し、体内に金属がある方や、ペースメーカー留置後の方などは、検査ができないことがあります。また 20-30 分程度狭い空間に滞在しなければならず、閉所が苦手な方はできないこともあります。

次に動脈瘤を調べる方法としては、点滴（静脈）から造影剤を投与して、CT を撮影する検査（造影 CT 検査）があります。利点としては、MRI よりも詳細に動脈瘤が判定できること、また比較的短時間で撮影自体は終わることです。しかし欠点としては、まず CT 撮影は X 線を投射しますので、X 線による被曝という問題があります。また造影剤投与により、時に副作用（嘔気、蕁麻疹、発汗、稀に血圧低下など）があり、腎機能障害がある方には腎機能が悪くなる可能性がある為、検査ができないこともあります。

更に精密に動脈瘤を調べる方法としては、カテーテル検査（脳血管撮影）があります。今度は動脈から造影剤を投与して、そこに X 線を投射することでより詳しく動脈瘤を調べることができます。脳に流れる血流をダイナミックに確認することで、より多くの情報を得ることができます。但し、X 線による被曝、造影剤を使用すること、血管内にカテーテルをすすめていくことで、稀に脳梗塞の危険性があることなど、危険性は MRI、造影 CT と比較して高くなります。

検査は危険性が低いものから選択して行っていくのが通常です。動脈瘤の存在を疑った際には、まずは頭部 MRI 精査は重要な検査と考えます。但しわかりにくい動脈瘤などは造影 CT の出番になり、根治治療を検討する際はカテーテル検査が重要になることもあります。

（つづく 次回 動脈瘤の治療）



広い空に薄まってウィルスも  
ころっとなくなってほしいものです